

薪ストーブを囲んで育む交流と地域計画

本格的な冬の到来を迎えた。山形県の内陸にある角川の里も、ここ数日雪が降り続いて、すっぽり足が沈み込むまでに積もった。これからの2ヶ月は雪との付き合いの季節となる。

雪国の住民は概して雪に対しては消極的な考え方をしているようだ。確かに雪下ろし、雪掘り（こちらでは家が埋まってしまうほど降るので、定期的に家を雪から掘り出す必要がある）、本道に出るための除雪作業など余計な仕事は増えるし、しかも労働の成果は春になれば雪が消えるとともに結局消えてしまう。以前筆者は、里での労働は確かな形として残ることが大きな特色だと書いた記憶がある。しかし里の仕事の中で唯一雪にまつわる労働だけは物理的な形としては残らないものということになるかもしれない。

だが、厳しい自然条件とは裏腹に、こうした環境によって里の人々に温かな生活文化が育まれていることは確かだ。角川の里は周囲を山に囲まれていることもあり、冬は薪ストーブを使っている家が多い。薪ストーブを囲んでの団欒は一種のコミュニケーション文化を育てていると言えよう。雪国の団欒にはお茶と漬け物が欠かせないものとなっている。春に採ったワラビなどの山菜は保存され、この時期最もおいしい状態となって出てくる。冬の郷土料理に舌鼓をうちながらお茶会というものは、ゆったりとしたものとなり、話も弾む。外は雪で夏ならば忙しい農業などの仕事もない。だから気持ちも落ち着いている。

角川の里では、山里の地域づくりをすすめていくための自然学校を立ち上げて4年目を迎える。毎年この時期は次年度の計画作りの季節と位置づけている。集落の住民が集まって、お茶（もしくは酒の場合もあるのだが）を飲みながら、じっくりと話をし、気持ちをそろえていきながら、翌年の活動計画を作っていく。テーマは会合ごとに決まっているものの、話し合いの流儀は、もちろん前述の薪ストーブを囲んでの団欒に準拠したものとなる。堅苦しい会議スタイルでは、よいアイデアも浮かんでこないし、一般の住民が発言しにくいということがある。地域で実際に活動を展開していく「作業員」は住民だ。だから住民が一番活動しやすい計画が良い計画ということになる。したがって活動を進める作業員である住民の生の声の大切だということになるのだが、一般的に言って活動に携わる作業員は口が重いという傾向がある。ところが、冬の薪ストーブ的な会議スタイルは、こうした人々の話を引き出すのに適した雰囲気醸

し出してくれる。もう一つ重要なのは、住民一人一人の性格や背景を熟知して
いて会議をスムーズに進めてくれる司会者（コーディネーター）の存在だ。角
川の里もそうだが、地域にはこうした司会進行に長けたおじさんやおばさんが
ちゃんといるものだ。彼ら（彼女ら）は、会議に集まる一人一人の背景や相互
の関係を即座に計算し、的確なタイミングで発言を求めたり、あるいは会議の
方向性や雰囲気調整したりする。

こんなわけで、この時期、外は雪が深々と降り積もっている寒々とした風景
でも、集会場を中心として屋内施設は意外とにぎやかだったりする。そして、
皆で春からの一年間の地域の活動を心待ちにするのである。

最後に忘れずに書き加えておこう。この時期、外では、またぎのおじさんた
ちが最も元気だ。今日も獲物を求めて闘志を燃やして山に向かっていった。も
し獲物がえられれば、今日の夜の会合には兎汁が出ることになるのだろう。